

## 「栄光が神に永遠にありますように」

2018年10月18日

ローマの信徒への手紙 11章 33節～36節 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。だれが主の相談相手であったらうか。だれがまず主に与えて、／その報いを受けるであろうか。」すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

パウロは、9章から11章まで長々と、イスラエル人と異邦人の問題を論じてきた。パウロにとって大きな悩ましい問題であったからである。パウロは異邦人伝道に使命を持ち、異邦人への伝道者であることを誇りにしていた。しかし、パウロはイスラエル人への伝道に燃えていた。パウロはユダヤ人伝道を第一義とし、訪れた町で、まず、ユダヤ人たちのシナゴグ（会堂）に行き、主イエスは旧約聖書の預言の成就者キリストであると語った。パウロの語る十字架で殺されたイエスをキリストと信じること、主イエスは十字架の死から復活したこと、このキリストを信じる者は、律法と関わりなく、義とされ救われるという信仰は、ユダヤ教徒には受け入れられず、激しく反発された。ところが、この福音は異邦人に受け入れられていった。それは、彼らもユダヤ教徒と同じように、宗教の戒律や犠牲に縛られていたが、戒律や犠牲に関わりなく、キリストをただ信じることによって、義とされ、神の命に与えると聞いて、自分のアイデンティティを見出し、素晴らしい解放を得る救いを知ったからである。

パウロは、このような状況でも、同胞イスラエル人を何とか救いに導きたいと願い続けた。イスラエルは、今は不従順の罪の中にあるが、神の子としての身分、契約などの賜物と招きは取り消されることはない。エリヤに神が告げたように、残りの者を残し、キリストの福音は受け継がれていく。聖なる根によるオリーブの木に、彼らは容易に接ぎ木されることができる。更に、イスラエル人が不従順に閉じ込められたのは、神が全ての人を憐れみ、キリストへの信仰を持つようになるためである。パウロは、同胞の不信仰を悲しみ、痛みながらも、必ず福音を受け入れる時が、神によって備えられると繰り返している。

そしてパウロは、「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか」と、神の知恵の奥深さに思いを馳せる。「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。だれが主の相談相手であったらうか。だれがまず主に与えて、／その報いを受けるであろうか。」を引用する。第二イザヤは「主の霊を測りうる者があろうか。主の企てを知らされる者があろうか。主に助言し、理解させ、裁きの道を教え／知識を与え、英知の道を知らせうる者があろうか（イザヤ書 40：13、14）」と記し、エレミヤは「誰が主の会議に立ち／また、その言葉を見聞きしたか。誰が耳を傾けて、その言葉を聞いたか（エレミヤ書 23：18）」と書いている。神を真剣に問うた二人の預言者も神の思いを知る術を持たないと語っている。誰も神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くすことはできないのである。

そこでパウロは、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」と告白する。全ては神から出て、神に動かされ、神に向かっている。人間には見えないけれど、神が統治、支配しておられ、終わりをもたらしめてくださる。神に栄光が永遠にありますように。全てを神に委ね、神への賛美の言葉で締めくくっている。